小林人

こばやしびと
Vol.41

愛する霧島で事故を起こしたくない

自然公園関係功労者環境大臣賞受賞

樋ノ口正光（ひのくちまさみつ）さん

登山には、必ずを持参するなたとのこぎりは20年使い続けている愛用品。登山道上の危険な倒木や木の根を切り安全確保をするために欠かせない

ふるさとの山、「霧島」。この山をこよなく愛し、40年以上見守り、登り続けている人がいる。

環境省自然公園指導員、樋ノ口正光さん、63歳（＝南西方）。

霧島錦江湾国立公園の霧島連山一帯での遭難事故の救助や美化活動などの功績が認められ、5月24日、自然公園関係功労者環境大臣賞を受賞した。

「自分一人の力で頂いたものではありません。救助や美化活動はみんなで行っている。今後は、特に遭難事故防止活動に力を注ぎたい」と感謝の気持ちと抱負を語る。

樋ノ口さんは、子どものころから霧島に登っていた。中学卒業後、集団就職で名古屋に行ったが、帰って来るたびに登った。そして20歳のとき、小林に戻ってきたのを境に、本格的に登山にのめりこんでいった。

そんな樋ノ口さんに、30歳のとき一つの転機が訪れる。初めて携わった遭難者の救助だ。1月、雪の降る極寒の韓国岳。警察や仲間と懸命に捜しまわり発見したが、すでに息がなかった。

「悔しい気持ちでいっぱいだった。それまで、大好きな山で死ねれば本望だと思っていた。しかし、この事故をきっかけに、愛する霧島で人が死ぬようなことは、起きてはいけないと考えが変わった」。

それから山に登るときは、救助活動を想定しながら登るようになった。時には、ヘッドライトをつけ夜間に登ることも。「救助活動は、夜間に行うこともある。普段から慣れておかないと」とその理由を語る。また、遭難防止の啓発や、捜索・救助の支援を目的とする「NPO法人南九州山岳救助隊」を設立するなど、積極的に活動している。

救助活動以外にも、登山客が安全に楽しめるよう、危険がおよぶ可能性のある枝や石を取り除くなどの簡易な登山道整備や道標の作成なども行っている。

霧島を登る樋ノ口さんの足取りは軽い。急な坂道でも年齢を感じさせないペースで歩いて行く。「元気である限り山に登り続けたい。そして、元気であり続けるためにも山に登り続けたい」

多くの人から愛されている霧島。樋ノ口さんのような陰の立役者によって、その美しさは保たれている。

写真 1）大幡池にて「ここで、中学生のとき遊んだ楽しい思い出が私の原点」と一言。2・3）「山には3つの坂がある。上り坂、下り坂、まさかです」。まさかの事態を防ぐために、道しるべの紐を木に括り付けたり、看板を立てたりしている。 4）霧島山の植生などの知識は定評がある。それを生かして登山ガイドも行っている。

【小林人】のコーナーでは、小林市在住や出身のキラリと光る人をご紹介します。